

自由とは何か？

奨励	木原 桂二〔きはら・けいじ〕
奨励者紹介	日本バプテスト連盟北山バプテスト教会教師

わたしたちは、祈りの場所に行く途中、占いの霊に取りつかれている女奴隷に出会った。この女は、占いをして主人たちに多くの利益を得させていた。彼女は、パウロやわたしたちの後ろについて来てこう叫ぶのであった。「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです。」彼女がこんなことを幾日も繰り返すので、パウロはたまりかねて振り向き、その霊に言った。「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。」すると即座に、霊が彼女から出て行った。ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。そして、二人を高官たちに引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております。」群衆も一緒になって二人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。そして、何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。

真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げってしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいます。」

(使徒言行録 16章16―28節)

「自由」を考える

今日は、皆さんと一緒に「自由とは何か」ということを考えたいと思います。早速ですが「自由」という言葉から、皆さんはどんなことを思い浮かべられるでしょうか。一般的に考えられるのは、自分の好きなことを好きなようにできるということではないかと思います。大学生という立場であれば、自分が学びたいことを学び、自分が望む進路へ進んでいくということになるでしょう。そうみていきますと、「自由」は前向きで喜ばしいものには感じられます。

けれども「自由」を得るということは、決してそれだけで済まされるものではありません。なぜなら自分が自由を得れば、その代わりに自由を損なう人が現れることもあるからです。タバコを吸う自由を満喫すれば、タバコの煙を吸いたくない人の自由が損なわれます。だからタバコが嫌いな人のために禁煙の場所を設けたり、場合によっては全面的に喫煙を禁止したりする場合もあります。しかしそうすると、今度はタバコを吸いたい人の自由が損なわれるので、その人たちを排除してよいのかという問題が生じます。

それから表現の自由という問題はどうか。何でも好きに表現できると言えば聞こえはよいのですが、しかしすべての人が、その表現されたものを見たいとは限りません。グロテスクな表現とか、性的な表現を見て不快に思う人もいるからです。このように、あちらを立てればこちらが立たずということが起きるので、私たちは常に判断に迷うことになりま

す。だから判断に迷わなくてもよいために法律や規制が作られます。ほとんどの人がこれぐらいなら納得できるだろうという線を出して、皆がそれを守るように義務づけるわけです。すべての人が満足できる法律や規制を作ることは不可能ですが、とりあえず法律や規制が守られる限りにおきましては世の中が平和になります。けれども、それは自由のなせる業ではなくて、多くの人が我慢しながらルールに従っているにすぎないということになります。

回心以前のパウロ

そこで、この問題を考える手がかりとして、キリスト教の基盤になっている聖書が「自由」について何を語っているかをみることにしたいと思います。

皆さんは、キリスト教関係の講義や、チャペル・アワーの時間にパウロという人物の名前を耳にしたことがあると思います。このパウロという人は、キリスト教を世界に広めるために最も貢献した人物として知られています。

けれども彼は、最初から熱心なキリスト教徒だったわけではなくて、ユダヤ教徒であったころはキリスト教に敵対する人物でした。パウロは自分が信じていたユダヤ教を守るために、キリスト教徒を迫害し、教会を荒らし回っていたからです。そんなパウロは、ユダヤ教のなかのファリサイ派と呼ばれるグループに属していました。ファリサイ派は、神の掟である律法を守ることににおいて厳格な人たちです。律法は生活や宗教について神が定めた信じられている掟なので、大多数のユダヤ教徒が、これを守ることに熱心でした。日々の生活のなかで、すべきことと、してはならないことが神の権威によって明確に規定されているので、迷うことなくそれを実行すればよいと信じられていたのです。

ところが、そのユダヤ教からキリスト教が発生したので、話がややこしくなりました。キリスト教は、ユダヤ教から生まれたのですが、掟を厳密に守るというあり方を選びませんでした。なぜならイエスは、愛を宣べ伝えたからです。皆さんのお手元にあるプログラムにも、春学期統一テーマとして「愛は、すべてを完成させるさずなです」とあります。この「愛」は、掟を忠実に守りさえすればそれでよいというあり方とは全く違うものです。イエスが伝えた「愛」は、傷ついた弱い立場の人に配慮するというものだからです。

イエスの時代には、その日その日を生きていくのに四苦八苦している人びとがたくさんいました。重病を抱えて働くことのできない人や、連れ合いを亡くして一人で生きていかねばならなかった女性が、その代表格であります。そういう貧しさを余儀なくされている人たちに掟を守れと強要するのは、大変残酷なことでした。生きていくだけでも精一杯なのに、神殿に行って献げ物をしなければならぬとか、宗教的な細かい生活習慣を守れと言われても、そんな余裕はどこにもなかったからです。だからイエスは、そういう貧しい人たちと出会い、共に食事をして分かち合いました。それは、弱い立場にある人たちを愛する神を証する行為だったのです。

ですからキリスト教は、厳格なユダヤ教から生まれたにもかかわらず、全く正反対の路線をいくことになりました。掟を忠実に守れたかどうかを大事するのではなく、一人の人間としてどう振る舞えばよいかを神に問いながら、愛によるかかわりを実践していったからです。

しかしそれゆえに、掟を守ることに厳格だったパウロは、キリスト教徒に対して怒りの炎を燃やしました。隅から隅まで、何一つ落ち度なく掟を守れる立場にあったパウロにとって、掟破りを認めているように見えるキリスト教徒たちが悪魔の集団のように思えたからです。キリスト教徒を全滅させることは神から与えられた崇高な使命であるとさえ、パウロは思ったに違いありません。

愛を発見したパウロ

ところがそんなパウロは、イエスが伝えた愛の重要性に気づくようになります。これが有名なパウロの回心と呼ばれる事件です。回心するまでのパウロは、掟を忠実に守って正しい人間になれば、神から認められると信じていました。しかし、キリスト教徒となってイエスを信じるようになってからは、愛によって生きることが本当の自由であると確信するようになったのです。

今日の聖書箇所16節以下の物語をみることにしましょう。あるときパウロは、占いの仕事をさせられている女奴隷に出会いました。パウロは、その女奴隷が助けを求めているらしいと感じ取ったので彼女を解放してあげました。それは女奴隷にとっては喜ばしいことだったのですが、これが大変な問題になります。彼女の主人が激怒したからです。女奴隷が仕事をしなくなれば、主人はその分の稼ぎを失います。だから主人は、女奴隷を解放したパウロを逆恨みして、彼を犯罪者に仕立て上げたのです。その結果、パウロは投獄されてしまいました。

かつてはキリスト教徒を牢獄に送り込んでいたパウロが、今度は奴隷を解放したために牢獄に送り込まれてしまいました。他人を自由にしたイエス・キリストが十字架にかけられてしまったように、他人を自由にした人が自由を奪われるという事件が歴史のなかで繰り返されています。だから私たちは、なかなか勇気をもつことができず、迫害を恐れることがあります。

けれども、イエスを信じたパウロにそのような恐れはありませんでした。25節によりますと、捕えられたパウロは、仲間のシラスと一緒に牢獄の中で賛美歌を歌い、神に祈りを献げていたと伝えられています。私たちが他の人から不当に苦しみを与えられ、自由を奪われ、場合によっては命すら奪われかねないときでさえ、神から与えられた私たちの魂が損なわれることはないという証がここにあります。私の魂はただ、私に命を与え、私を生かしてくださる神のものであるという信仰が、パウロのような自由な生き方を導いているのです。

命に配慮する自由

このように、パウロと仲間のシラスが神を賛美していると、大地震が起きたので牢獄の扉が全部開いてしまいました。もともと無実の罪で捕まっているわけですし、偶然にも牢獄の扉が全開になったわけですから、これは脱走する絶好のチャンスです。もしも皆さんがパウロの立場だったらどうするでしょうか。私だったら、一目散に逃げ出して自由を満喫したいと思うところです。ところが、パウロにとって自由とは、そういうものではありませんでした。

これは当時の残虐な時代の話です。囚人たちが大地震の混乱に紛れて一人残らず脱走したら、看守たちは職務怠慢とみなされて死刑になってしまうことが予測できます。だから看守は扉の開いた牢獄を見て真っ青になりました。27節にありますように、彼は死刑になるくらいなら自分で死んだ方がましであると判断し、剣を抜いて自殺しかけたのです。

ところが、そのような看守の判断は間違っていました。なぜならパウロは逃げずに、看守の命を守ろうとしたからです。28節の言葉が示すように「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる」と、パウロは叫びました。パウロは逃げられたのに逃げないで、自分とは敵対する立場の人の命を守るように行動したのです。これがイエス・キリストを信じ、愛と自由に生きるパウロの姿なのです。

本当の自由は、ただ自分のやりたいことすればよいという身勝手なあり方とは全く違うものです。他人の自由と命を守るために、自分の立場が失われることや、自分の身柄が拘束されることをあえて選択するという自由もあるからです。まさに他人を配慮することによってこそ成り立つ、本当の自由を示すパウロの姿がここにあると言えるのではないのでしょうか。

パウロに大きな影響を与えたイエスは、弱っている人や傷を負っている不利な立場にある人の命が守られることを目指して活動しました。その結果、イエスは人びとの手によって迫害され、十字架にかけられて殺されてしまったのですが、キリスト教会はこのイエスを救い主であると信じています。なぜならイエスの愛ある働きこそが、私たちの命を真実に解放するからです。パウロの姿に見られるように、命への配慮という自由に生きることができるのです。

さて、私たちの社会はどうでしょうか。命への配慮という自由があるでしょうか。むしろ、経済中心の価値判断が依然として幅を利かせているこの時代にあって自然環境が著しく破壊され、大切な命が損なわれているように思われます。命への配慮がないところに本当の自由はありません。そのことが、昨年の震災と共に発生した原発災害によって明らかになりました。

それゆえ私たちは、このような時代を生きる者として、命への配慮という自由に向けて新しい一歩を踏み出す必要があるのではないかと思います。このことを祈りに覚えつつ、今日のメッセージを終わります。

2012年5月9日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録